

古代採鉱民族の構成

——長門・周防・豊前を中心に——

井 上 孝 夫

(目次)

はじめに

第1節 古代長門国周辺地域における銅の生産

1. 「はんどう山」のフォークロア
2. 長門国と和銅開弥の鑄銭
3. 長門・周防の銅山と秦王国

第2節 香春岳の神々

1. 香春岳と銅
2. 香春岳の神々
3. 銅生産の主体

結 語

<注>

<参考文献>

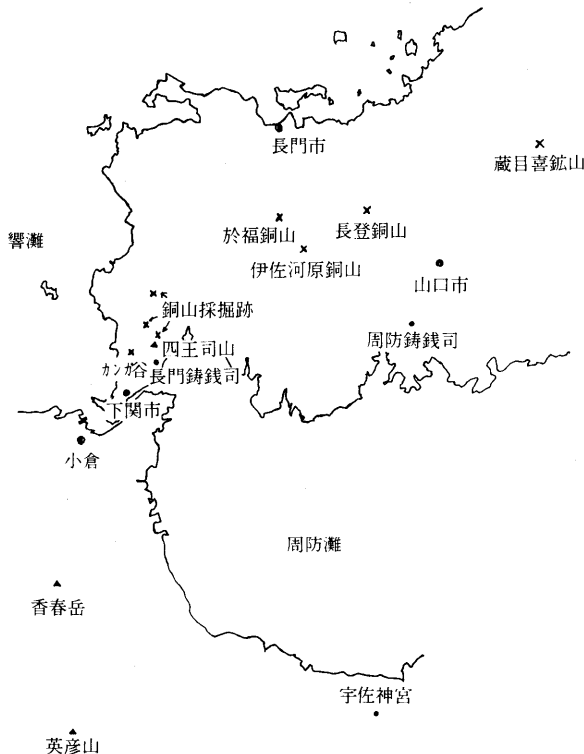
はじめに

弥生時代から古墳時代にかけて、朝鮮半島から日本列島へ大量の人口移動があった。一説によると、日本列島の人口は縄文晩期に約7万6000人であったのが、弥生時代になると約60万人へと急増している⁽¹⁾。この大量の渡来人たちは日本列島に「稲」と「鉄」という新しい文化を持ち込んだわけだが、その文化の物的基盤は銅や鉄などの鉱物資源の支配にあったとみてよい。この時代、日本列島には様々なクニに鉄王が存在し、採鉱と農

耕に従事する奴隷を支配していたのである。そしてクニ同士は鉱物資源をめぐる戦争をつづけ、やがて勝者による国家統一が果たされることになる。

本稿ではこの鉄王支配の過程を長門、周防、そして豊前の三国に即して検討したい。この北部九州から本州西端にかけての一带は古代における最大にして最強の部族である秦一族が居住していた地域であり、その鉱物資源をめぐる支配の過程は古代日本国家の形成過程における一つの重要な部分を構成すると考えられる。

〔図1〕「古代採鉱民族の構成」関連図



以下ではまず、下関地域に残る「はんどう山」の伝説の解釈を手がかりに、長門国そして周防国における鉦山とその生産主体について目を向ける。次に、この一帯を豊前国とのかかわりに即して「秦王国」という枠組から検討していく。これらの作業をつうじて古代日本における採鉦民族の重層的な構成を明らかにし、「日本的なもの」の一端に迫ってみたい。

第1節 古代長門国周辺地域における銅の生産

1. 「はんどう山」のフォークロア

下関市有富地区の北東に「はんどう山」と呼ばれる小高い山があり、その山にまつわって次のような伝説が残されている。

ある暴風雨の日の翌日、一人の農夫が山中から大きな「はんどう」（瓶）をみつけた。彼はそれを家に持ち帰って酒仕込みに使ったところ、突如としてその「はんどう」は「竜王、竜王」とも聞こえるように鳴り響き、家ごと揺れ動き出した。そして「はんどう」はこなごなに割れてしまった。

村人たちは「はんどう」を竜王が嵐のとき大あばれして落としたものと考え、破片を集めて山の頂上に運び、社を建ててていねいに祭ることにした。以来この山は「はんどう山」とか竜王山とか呼ばれるようになり、村人たちが雨乞いを祈願する山となった⁽²⁾。

この伝説で語られているように、はんどう山の山頂には三個の尖石で囲んだ簡単な神殿があり、その御神体は「はんどう様」と呼ばれる壺形須恵器の土器片だという。1958年に吉村次郎、伊東照雄という下関市教育委員会のメンバーが28個の破片から「はんどう」を復元したが、その大きさは口径40センチ、胴径80センチ、高さ約90センチのものになった⁽³⁾。この須恵器の壺がいかなる目的でつくられたのかははっきりとしないが、一つの可能性をいえば、もともと古墳におさめられていたのではないかとも思われる。小林茂・中原雅夫『わが町の歴史 下関』（1983年）では下

関市棕野町の岩谷古墳（横穴式石室を墓室とする円形墳）に関連して、「〔古墳の〕造営工事のなかばで石室入口の上とうしろに須恵器の大甕を据えておき、祭事を行なったのち、さらに土盛りをして古墳の形をととのえていた⁽⁴⁾」と指摘されている。綾羅木川右岸に位置する有富地区の一带にも円形墳がいくつか残されているから、農民が掘り出した「はんどう」も古墳造営時の祭祀用の大甕の可能性が高いようにも思えるのである。そうだとすれば、こなごなに割れた「はんどう」のたたりは墓をあばかれた死者の怒りだったにちがいないのである。

ところが伝説では竜王の話が登場してくる。話の筋道からみて、この伝説に登場する有富の農民たちはすでに水神としての竜王を信仰していることは明らかである。従ってこの伝説は「はんどう山」と称されていた山が農民のあいだの竜王信仰と結びついて出来上ったものと解釈することができるだろう。つまり雨を望む農民の強烈な信仰が最初にあって、それが「はんどう山」の由来と結びついたわけである。この伝説がいつ頃つくられたものかははっきりしないが、水神としての竜王信仰は江戸時代に広範にわたって広まっていったとみることができる。特に水利の悪い農村地帯ではその信仰は強烈だった。有富の集落から2キロメートル南東の一の宮にも竜王山と呼ばれる里山があり、そこにも竜王神社が祭られている。創建は江戸時代後期の天保5年（1834年）11月で、そのち明治初年に再建され、2度の修理を経て、1970年に改築されて現在の姿をとどめている。有富のはんどう山にまつわる伝説の形成年代は一の宮の竜王神社の創建年代が一つの手がかりを与えているように思われるのである。

だが有富の竜王山はもともと「はんどう山」と呼ばれていた。はんどうとは「飯銅」ないし「半銅」の字が当てられ、「茶の湯その他に供する金属性の容器」（『広辞苑』第3版）を意味する。しかしここではもう一步深読みをしてみたい。「はんどう」とは文字どおり「半銅」ではなかったのか、ということである。つまり「半銅」とは熟銅として利用される前の不純物を含んだ銅鉱石のことだったのではないかという点である。

こう考えるに至った理由ははんどう山の一つの沢筋に「カンガ谷」と呼ばれる沢があり、いまでもそこには銅分を含んだ小石が落ち、谷間の岩々には銅特有の緑青が付着しているからである。しかもカンガ谷では銅の精錬を行っていたという伝承が残されている⁽⁵⁾。有富在住の岩谷綾子さんからの聞き取りによるとカンガ谷とは「金鑄ヶ谷」の意味だというのが、筆者としてはむしろ金属を意味する「金^{カネ}」に由来する「金ヶ谷」が転訛した呼び方とみるべきだと思われる。有富のはんどう山の名称はこの地にどこからか銅鉱石を運んで来て集積させ、この山の谷筋で粗鋼として精錬していたことに由来するのではないだろうか。「はんどう」という名称や、カンガ谷に残る「物証」とそれにまつわる伝承を考えてみると、このような仮説をたてることにも一定の合理性があるはずである。

ではなぜ有富のはんどう山に銅鉱石が集積され、精錬が行なわれたのだろうか。

まず、背後の山に銅山がなければならぬ。山口県教育委員会の生産遺跡分布調査によれば、現行の下関市域において銅山として記載されているのは次の4カ所である⁽⁶⁾。

- ・阿内^{あうち}（銅）——清末地区。1902年開坑。
- ・大金（銅・鉄）——小月地区。大正年間（1912～1926年）に稼行。
- ・源助沢（銅）——小月地区。1901年開坑。
- ・笠山（銅・鉄）——小月地区。明治期（1868～1912年）に銅、明治末に鉄を採掘。

これらの鉱山はいずれも明治時代以後に採掘されていたものである。もちろんそれ以前に採掘されていなかったとは必ずしもいえないが、地理的な位置関係からみて、有富のカンガ谷と直接結びつくものではないだろう。しかしこれらの鉱山のほかに、地元の郷土史研究によれば、有富の内日^{うちひ}地区（内日公民館から200メートルほどのところ）と小野地区（老

僧岩付近)に銅山があったことが確認されている。内日地区には河原地名かわらが残り、豊前国香春岳との関連が注目されるし、小野地名も漂泊民小野猿丸とのかかわりを暗示しているかもしれない。また筆者の聞き取りによっても、四王司山の北側にも銅の採掘跡があることがわかった。四王司神社の祭神は保食神とともに火の神(火産霊神)であるし、別名「宝鏡山」とも呼ばれるこの山には「朝日夕日の指すところ、黄金千貫、朱千貫」の伝説(朝日夕日伝説)が残り、金属資源採掘との関連を示している。いずれも採掘年代などの詳細は不明であるが、地理的位置関係からみてカンガ谷の銅がこれらの銅山から運び込まれてきた可能性は高い。

次に必要なのは「火」である。金属の精錬には高温で鉱石を融解させなければならない。そのためには燃料(薪)と風が絶対の必要条件となる。風は谷筋を低いところから高いところへと上昇する。カンガ谷はその条件に当てはまる。また燃料となるべき木材は背後の山から刈り出すことができる。はんどう山の北西に位置し、中腹に竹生観音のある通称「竹生山」は2つの峰から成るが、西峰を「観音山」、東峰を「千束焚」と呼んでいる。この「千束焚」という名称の山は下関市と豊浦町の境界をなす鬼ヶ城(620メートル)の一角にもあるが、いずれも「雨乞い」の祭事を行なった山である。しかし「千束焚」の名称から考えて、この東峰の山は原初的には「火」の信仰に関連しているとみるべきだろう。おそらくここは、金属精錬のための燃料供給とかかわっていたのではないかと思われる。

これで基本的な条件は揃ったことになるが、有富地区にはさらに「火の神」が祭られている。この「火の神」の本来の鎮座地は集落の南側であったが、いまははんどう山山頂の社に合祀されている。この「火の神」の存在も金属精錬にかかわるものとみることができよう。

このように、有富のはんどう山の一带は綾羅木川上流域の銅山から採掘した銅鉱石を運び込んで精錬していた場所とみることができる。その事実は伝承のかたちで細々と今日まで生き残った。しかしはんどう山の由来が農民(水稲耕作者)の立場からのみ語られているように、かつてこの地域

で行なわれていた銅精錬という歴史的事実はほとんど忘れ去られている。このことはまた、この地域における銅の集積と精錬がかなり以前の時代の事柄だということを示しているようにも思われるのである。

2. 長門国と和同開珎の鑄銭

では、はんどう山の銅は何に使われたのか。前記した岩谷綾子さんによると、カンガ谷の銅は「大昔、ここで銅板をつくって長府に持っていった」といい伝えられてきたという⁽⁷⁾。この伝承に基づいていけば、はんどう山の銅は平安時代に長府におかれた長門国鑄銭司に送られて、和同開珎の原料(料銅)として使われたものと解釈することができる。

長門国鑄銭司は下関市長府の現・覚苑寺境内を含む一帯にあり、この地からは江戸時代以降、和同開珎の錢筭、鑄銭に使用した鞆口、埴塙などが出土し、現在では国の史跡に指定されている(ただし、発掘調査は行なわれていない)。だが文献のうえで、長門国鑄銭司がいつ設けられたのかは定かではない。ただ『続日本記』天平2年(730年)3月13日の記事に「周防国熊毛郡牛嶋の西汀、吉敷郡達理山の銅を長門の鑄銭に充てる」旨の記載があり、おそくとも730年にはこの地で鑄銭がはじまっていたとみることができる⁽⁸⁾。その後長門国鑄銭司は一時廃止されるが弘仁9年(818年)3月に復活し、富寿神宝の鑄銭を行なっている。しかし天長2年(825年)には事業は縮小され、天長3年(826年)9月に銅の輸送は中止され、天長4年(827年)に鑄銭司は周防国(山口市陶^{すゐ})に移されている。以来、周防鑄銭司は約150年にわたり国内唯一の鑄銭所として、承和昌宝、長年大宝、饒益神宝、貞観永宝、寛平大宝、延喜通宝、乾元大宝を鑄造した。このように文献によれば長門鑄銭司が機能していたのは730年前後の時期および818～825年の時期ということになるが、二度にわたる鑄銭司の機能停止の原因は料銅の不足、人民の疲弊、農作物の不作などによると伝えられている。

では、長府に鑄銭司が設けられたのはなぜか。その理由としては、背後

に銅山があったことや、瀬戸内海航路あるいは山陽道を使って料銅の輸送が可能だったというような事情が考えられる。しかしより重要なのはこの地域に採銅や鑄造に関する技術者がおり、すでにかなり以前から銅を含む鉱物資源の採掘が行なわれていたという点だろう。つまり、長門国は古代における製鉄や製銅の国だったということなのである。

3. 長門・周防の銅山と秦王国

長門国、そして周防国における銅山として前節までに、下関市の内日、小野、四王司山の銅山、また『続日本紀』記載の牛嶋、達理山の銅山について触れた。これらに加えて、長門・周防両国の古代における主要銅山として次のようなものがある⁽⁹⁾。

〈美祢郡美東町長登銅山〉

天平勝宝期(749～756年)に2万6474斤(1斤=671グラム)の銅を東大寺大仏鑄造のために産出している。また谷川健一氏は承和3年(836年)頃の記録として、美祢郡長登と阿武郡桜郷(現・阿東町生雲)の銅を長府まで運んで銭を鑄たというものがある、としている。谷川氏の依拠した文献は不明だが、836年には長府の鑄銭司は閉鎖されているので鑄銭のためには周防に運ばれたのではないかと思われる。

〈美祢市於福銅山〉

『風土注進案』に「山城山(山条山)にこがねのつるありしを掘り出せし時、山子ども“おふく・ふく”と呼びしより、於福と唱え来たりと申し伝えて……」とあり、藩政期に稼行していた記録が残る。しかし於福は『延喜式』では「意福」と書かれ「イフク」と読んでおり、それは古代における「ふいごを司る鍛冶氏族」である伊福部氏につうじる、というのが谷川健一氏の説である。本稿でもこの説を支持したい。だが近江国伊吹山麓に本拠をおいていた伊福部氏がこの地とどのようにかかわるのかは謎で

ある。

〈美祿市伊佐河原銅山〉

大内時代に繁栄した一大銅山で、厚保^{あつほう}、伊佐、河原に「金山」地名が残る。豊前国の産銅地帯「香春」と同一地名であることから、この二つの銅山は何らかの関係をもつと考えられる。

〈阿武郡阿東町蔵目喜鋳山〉

蔵目喜鋳山は桜郷鋳山と田万鋳山（現・田万川町）の総称で、このうち桜郷鋳山は巖嶋神社由来記によると大同年間（806—809年）開山伝承をもつ。以後、延徳年間（1489—92年）に繁栄した。『延喜式』（主税上）によれば、蔵目喜より長門鑄銭所へ毎年銅2516斤10両2分4銖、鉛1516斤10両2分4銖、を送ったという。

これらの鋳山は他の多くの場合と同様に、稼行年代が連続しているわけではなく、また中世以前に稼行していたことを示す資（史）料も限定されている。しかし伝承や鋳山名から判断して、ここでは古代における産銅地として扱ってみたい。そして古代においてこれらの銅山と最も深くかかわっていたのは朝鮮半島からの渡来人・秦氏を主体とする採鋳部族だったと考えられる。それを裏づけるのが『隋書東夷伝』中の記述である。『隋書東夷伝』では推古16年（608年）、隋の煬帝が日本に裴清を遣わした際、中国より日本に至る道順として、隋—百濟—竹島—都斯麻国（対馬国）—支国（壱岐国）—竹斯国（筑紫国）—秦王国—十余国—海岸という経路が記され、筑紫国の隣に「秦王国」が存在することが示されている。この秦王国は周防国につうじる秦一族の居住地である。実際、滋賀県石山寺に伝わる延喜8年（908年）の周防国玖珂郡玖珂郷戸籍によると、人口339人中155人は「秦」姓である。またそれより遡って天平10年（744年）には玖珂郡の大領・秦^{あなたり}皆足は周東町用田の二井寺山極楽寺を創建している。限られ

た史料ではあるが、これらは周防国と秦氏との関係を示すものといえるだろう。

再び『隋書』に戻れば、『隋書』は秦王国の人が「華夏」（中国人）に似ているとしている。この点について平野邦雄氏は『魏志』以来新羅について「秦人＝中国人＝華夏という一貫したシェーマがある」ことを指摘し、中国にとって秦王国は「新羅の再版」と考えられていたのではないかと論じている。そしてさらに、豊前・長門とともに、周防は秦氏の集団的居住地だったとしている⁽¹⁰⁾。筆者はこの指摘を積極的に支持したい。「鉄の新羅」から渡来してきた採鉱民・秦氏がこれら三国を居住地として選択したのであれば、これらの国々が古代の西日本における極めて有力な産銅地帯だったとしても少しも不思議ではないからである。

だが秦王国の存在や、さらに長門・周防国の銅生産について見極めるためには秦氏のもう一つの本拠地である豊前国の状況を検討する必要があるだろう。次節では豊前国の香春岳と宇佐八幡宮を中心に、そこに祭られた神々の素性を解き明かすことによって、秦氏の実態に迫ってみたい。

第2節 香春岳の神々

1. 香春岳と銅

和銅開珎鑄銭のために豊前国香春岳の銅が使用されていたことはよく知られている。『北九州市立考古博物館常設展示図録』（1985年）にも、「鑄銭司とは古代の国営造幣局です。……この近くでは山口県の長門（下関市長府町）と周防（山口市鑄銭司）の鑄銭所跡があり、豊前香春岳の銅が供給されました」とある。また『豊前国風土記』逸文には、「田河の郡。鹿春の郷。《郡の東北にある。》この郷の中に河がある。年魚がいる。……この河の瀬は清い。それで清河原の村と名づけた。いま鹿春の郷といっているのは訛ったのである。昔、新羅の国の神が自分で海を渡って来着いて、この河原に住んだ。すなわち名づけて鹿春の神という。また郷の北に峰がある。頂上に沼がある。《周圀三十六歩ばかり。》黄楊樹が生えている。ま

た龍骨がある。第二の峰には銅と黄楊、龍骨などがある。第三の峰には龍骨がある⁽¹¹⁾と記されている。この「鹿春」が香春であり、新羅系渡来人が開発した土地である。文中の三つの峰はそれぞれ香春岳の一の岳（標高もと491メートル）、二の岳（471メートル）、三の岳（508メートル）を指すものとみたい。また龍骨をめぐる諸説があるが、これは石灰岩とみる説を支持したい⁽¹²⁾。香春岳は全山とも石灰岩の山であり、1935年以来日本セメントによる大規模な採掘が行なわれているからである。おそらく採鋳技術をもった新羅系渡来人たちは香春岳の地表に露出した石灰岩層を手がかりに銅鋳を掘り当てたのだろう。従って香春という名称も古代朝鮮語で銅を意味する「カリ」、「クリ」が転訛した地名とみるべきである⁽¹³⁾。8世紀に記された『風土記』では「郡・郷の名は好字を書け」（『続日本紀』和銅6年（713年）5月2日）という命令のもとに、「清い河原に基づき鹿春にした」とその由来を語るが、香春とは原初的には石灰岩をたよりに銅鋳脈を探り当てた新羅系渡来人の採掘地に由来する「銅」を意味する地名だと解釈すべきである。8世紀に入って、この金属地名は国家権力によって抹消させられたとみることができるのである⁽¹⁴⁾。

2. 香春岳の神々

香春岳の周辺にはこの新羅系渡来人にまつわるいくつかの神社が祭られている。ここではその由来を検討することによって、古代採銅民の姿を探り出してみることにはしたい。

まず豊前国最古の神社といわれる古宮八幡宮を取り上げよう。社伝によれば古宮八幡宮は和銅2年（709年）に創建され、もとは阿曾隈神社古宮と称していたという。もともと三の岳山麓の阿曾隈の地に祭られ、1599年に牛斬山の東側の現在地に移転したものである。祭神は豊比咩命であり、のち貞観元年（859年）に神功皇后と応神天皇の二神を勧請して八幡宮となった。古宮八幡宮は神亀4年（727年）の宇佐八幡宮の放生会にあたって、御神鏡を奉納した神社として有名である。鑄造者は宮司の長光氏で、

三ノ岳から産出した銅によってつくり上げたといわれ、その鑄造所は清祀殿跡として福岡県史跡に指定されている。

次は一の岳山麓に位置する香春神社である。社伝によれば香春神社は崇神朝の創建とされる。祭神は第一座に「神代に唐の経営渡らせ給ひ崇神天皇の御代に御帰国」と伝えられる辛国息長大姫大目命、第二座に「天照大神の第一皇子にして二ノ岳に鎮め給ふ」とされる忍骨命、そして第三座に「神武天皇の外祖母住吉大明神の御母にして三の岳に鎮り給ふ」とされる豊比売の三神である。これらの祭神のうち主神である辛国息長大姫大目命について谷川健一氏は辛国は韓国すなわち新羅国であり、息長は「フィゴの風がよく通る」の意味で、大姫は巫女的性格を示し、大目は「ダイマナコ」で「一つ目の鍛冶神」につうじるものと解釈し、「新羅からやって来て、ふいごを使って銅を鑄造する一つ目の神に仕える巫女」と捉えている⁽¹⁵⁾。筆者は基本的にこの説を支持したいが、息長なる名称については「息長帯比売」（神功皇后）との関係が気になるところである。この点についてはのちに検討することにしよう。また第二神忍骨命について谷川氏は「忍」は「大」、「骨」は「穂」で、『記』『紀』にいうところの天忍穗耳命であり、それは天大耳命につうじ、南方渡来系種族の奉斎した神ではないかとしている⁽¹⁶⁾。しかしこれとは別の見方もある。香春神の三座構成は天台宗の権限信仰に基づく三山配祀に由来し、「新羅神」としての辛国息長大姫大目命、「国神」としての豊比売、それに「天神」として忍骨命を加えたとする説である⁽¹⁷⁾。筆者としては基本的にこの説を支持したいが、香春岳周辺に南方系渡来人の痕跡があるか否かは残された課題である。最後に、第三座に祭られる豊比売は古宮八幡宮の主神豊比咩命と同一神である。このことからわかるように、豊比売はこの地の地母神とみるのが妥当といえるだろう。ただし豊国につうじる豊比売の名称の由来については未解決の問題といわなければならない。

なお、香春三の岳の東方には都怒我阿羅斯等を祭神とする現人神社がある。この神社について金達寿氏は香春岳をとりまく古宮八幡宮、香春神

社、現人神社のうちこの現人神社が最も古い神社であるとして、次のように述べている。

「筑前のこちらにも天日槍集團ののこした製鉄遺跡はいたるところにあって、……その天日槍集團はしだいに移動しはじめ、その中心的な一部は、豊前の香春岳の銅鉞を発見してここに定住した。

そしてかれらはまず、最初にその銅鉞を発見した三ノ岳（採銅所）東麓に、天日槍集團のシャーマンで、かれらの守護神ともなっていた比売神を祭った。それが天日槍を二つに人格化した都怒我阿羅斯等を祭神とする現人神社で、これがさらにまた二ノ岳、一ノ岳へと広がって、豊比咩命を祭る古宮八幡宮となり、辛国息長大姫大目命を祭神とする香春神社となったのである⁽¹⁸⁾」。

古宮八幡宮を豊前最古とする定説を否定するこの金説は果たして支持し得るものだろうか。その検証のためには現人神社の由来を考えなければならぬが、現人神社について天本孝志氏は鬼ヶ城（香春岳城）城主の原田五郎義種の御霊を祭った16世紀の創建だと述べている⁽¹⁹⁾。確かに都怒我阿羅斯等は新羅渡来の天日槍の人格化ではあるが、それがこの地に勧請されたのは古代の新羅系渡来人とは遠く隔った近世初頭のことだったのである。従って金説はここで支持し得るものではない。

香春岳をめぐるのはもう一つ、二ノ岳の山麓に最澄の建立とされる天台宗の神宮院がある。最澄は唐に渡るに際し、航海の安全を願って宇佐八幡宮と賀春（香春）神社に参詣し、無事帰朝したのち神宮院を建立したとされる。最澄や空海と香春の地がどのような関係にあったかは定かではないが、彼らの学んだ密教は採鉞と深いかかわりをもつ山岳宗教であり、そのような観点から神宮院の存在は理解しなければならないと思われる。つまり古代採鉞地帯が最澄・空海を引き寄せたということである。

さて、香春岳をめぐるには以上のような寺社が存在する。その寺社と祭神についての検討結果をまとめれば、まず新羅系渡来人が採鉞目的にこの香春の地に渡来し、地母神として古宮八幡宮の主神としての豊比咩命を祭

り、それがのちに辛国息長大姫大目命と重ね合わされて香春神社に祭られたということになるだろう。

なお、この豊比咩の「豊」の由来については、『豊後国風土記』のおけるおよそ次のような記述に注目したい。

「昔、^{もろひく}纏向の^{ひじろ}白代の宮に天の下をお治めになった大足彦天皇（景行天皇）はみことのりして、^{とよくにのぬい}豊国直らの祖の^{うなて}菟名手を豊国を治めに派遣された。〔菟名手は〕豊前の国の仲津郡の中臣の村に行きつしたが、その時日が暮れてしまったのでそこに旅の宿りをとった。その日が明けて夜明け方、たちまち白い鳥が出てきて北から飛んで来て、この村に舞い集まった。菟名手はさっそく下僕にいいつけてその鳥をよく見るように遣らせた。するとその鳥は見るまに化して餅となった。ほんのすこしのあいだに、こんどはさらに数千株もある^{いも}芋草に化した。花葉は冬でも栄えた。菟名手はこれを見て不思議なことに思い、すっかり喜んでいった、『鳥が生まれ変わった芋などというものは昔から一度も見たことはない。至高の徳が感応し、天地の神のめぐまれためでたいことのしるしである』と。とやかくして朝廷に参上して、この次第をことごとく天皇のお耳に入れた。天皇はこれを聞いてお喜びになり、やがて菟名手を勅して『天の神から下さっためでたいしるしの物、地の神から授かった地の^{とよくも}豊草である』と仰せられ、かさねて姓を賜い^{かばね}豊国直^{とよくにのぬい}といった。これによって豊国というようになった。⁽²⁰⁾」

ここでは豊国の由来が数千株もある芋草や冬でも栄える花葉のような豊かな大地に由来するものだとして述べられている。しかしこの文章を字づらどおりに読んでみると、『豊後国風土記』「速見郡田野」の条の次の一文はよく理解できない。

「この野はひろびろと大きく、土地はよく肥えていて、田を開墾するのに好都合なことはこの土地とくらべうるものがないほどであった。昔はこの郡の農民たちはこの野に住んで多くの水田を耕したが、自分たちの食う分の食糧には有り余って、蒔りとらずに田の畝にそのまま置き放しにして

いた。大いに富み奢り、餅を作って〔弓を射るための〕的とした。ところが餅は白い鳥と化ってとびたち、南の方に飛んで行った。その年のうちに農民は死に絶え、水田も耕作するものもなく、すっかり荒れはててしまい、それから後というものは水田には適しなくなった。いま田野^のといっている、そのことの由来はこうである。⁽²¹⁾

どうして餅が白い鳥になり、そのあと田が荒れたのか理由は謎である。そこで吉野裕氏は「餅」を「砂鉄」、「芋」を「鉦^{つづ}」に読み変え、『風土記』における「語りごと」の世界を解き明かしている⁽²²⁾。すると『豊後国風土記』の記述は「白鳥が砂鉄に変わり、さらに鉦に化けた」という主旨になり、結局「豊かな土地」とは「豊かな鉱物資源を埋蔵する土地」ということになる。従って「豊」の字を冠した豊比咩命とはそのような土地の地母神としての位置を占めるものといえるだろう。

これで先に挙げた未解決の問題のうちの一つである「豊」の由来が解けた。次に残るのは香春と忍骨命に象徴される南方系渡来人との関係である。そこで香春における弥生時代の遺跡をみると、宮原遺跡の箱式石棺出土の内行花文鏡（中国後漢時代）とそれをモデルにした日本製の小型内行花文仿製鏡の存在が注目される。この仿製鏡は紀元200年頃に香春岳の銅でつくられたものであり、1983年には奈良県の野山古墳群の一つからも同じ鑄型でつくられた仿製鏡が出土している⁽²³⁾。長光の周辺は紀元前100年から紀元200年のあいだの土器・石器が数多く出土しているから⁽²⁴⁾、この時期から採銅がはじまっていたとみることができる。その主体を広く「倭的世界の人々」と呼ぶことができるが、彼らは忍骨命の奉斎者というよりは豊比咩の奉斎者とみるべきではないかと思われる。従って谷川健一氏のいう忍骨命を南方系渡来人が奉斎していたとする説はここでは支持できない。香春三神の経緯については三山配祀説が説得的だと思われる。

古代の産銅地香春岳をめぐる神々はおよそ以上のようなものである。そこに祭られた神々を検討することによって、香春岳には倭的世界の人々と新羅系渡来人との重層的な文化が存在していたことを確認することができ

る。次項では残された問題の一つである「息長」なる名称の由来を手がかりにして、この民族・文化の重層性をさらに追究してみることにはしたい。

3. 銅生産の主体

豊比咩を奉斎する人々に次いで、香春岳には朝鮮半島から新羅系渡来人が移住してきた。この渡来人は「秦人」と呼ぶことができる。「豊前国では秦部が圧倒的に多く、人口比率は90%以上を占めている。このすぐれた採銅技術集団は新羅系の渡来人だったにちがいない⁽²⁵⁾」と指摘されているように、大宝2年(702年)の正倉院の豊前国戸籍残簡でみると、総人数611人に対して秦部姓316人、勝姓252人、その他43人、となっている(勝氏は秦氏の一族である)。彼らは「辛国神」(辛国大姫)を奉斎していた。そしてそこに、「息長」の名を冠し、「息長大日命」を奉斎する一族が移住してきたのである。

では、この採鉱と深くかかわる集団は一体どこから来たのだろうか。息長一族の本貫地は近江国吾名(阿那郷、のちの息長村)であり、ここは『日本書紀』によれば天日槍が宇治川を遡って入った地であるから、近江と北部九州とは、日本海を航海し、天日槍に代表される新羅系採鉱族によって一つの連関性をもっていたのではないかと思われる。また近江の吾名(阿那)の名称も長門国の旧名「穴戸」の「穴」に関係があるのではないかとも思われる。そして実際のところ、この天日槍の移動経路は宇佐八幡宮を構成する三神職(辛嶋氏、大神氏、宇佐氏)のうち、辛嶋氏に伝わる伝承によって確かめることができるのである。それによると、辛嶋一族の奉斎する神は欽明天皇の時代にまず宇佐郡辛国宇豆高島に降臨し、そこから大和国膽吹嶺(伊吹山)に移り、そのち瀬戸内海をとって宇佐郡馬城峰に現われたという⁽²⁶⁾。この辛嶋氏は「勝」姓をもち、古宮八幡宮の祭祀者である長光氏や香春神社の宮司である赤染氏とも同族であり、その伝承は新羅系渡来人の足跡を伝えるものとみることができる。

しかし畿内から宇佐に移動したのは『承和縁起』や『石清水文書』のな

かの宝亀4年(773年)1月18日付の「大神田麻呂解状」といった文献のうえでみると、6世紀末の大神比義とその一族ということになる。大和三輪山の大神より派遣された大神比義は辛嶋氏古伝では大和伊福部郷より宇佐の地へと入った。その目的は既存の氏族を天皇中心の祭祀体系に組み入れることであり、その背後には百濟仏教の興隆をめざす蘇我馬子の支援があったとみられている⁽²⁷⁾。

このように、畿内と豊前とは二層の関係で結ばれていた。そして大和伊福部の地から「息長」の名称を持ち歩いたのはやはり大神一族であったとみるべきだろう。というのは、百濟系の大神一族は新羅系採鋳集団(倭鍛冶)に対して、より先進的な採鋳集団(韓鍛冶)を代表するものであるし、長門・周防に残された「(イ)フク」なる鋳山地名が彼らとのかかわりを示していると思われるからである。

かくしてここに、豊前国における秦氏(倭鍛冶)と息長氏(韓鍛冶)の融合が成立し、辛国息長大姫大目命が出現するのである。そして彼らこそ、律令国家体制のもとでの銅生産の主体なのであった。

結語——製鉄民族の重層性——

長門と周防には太宰府、大和、河内、山城、近江、武蔵とともに、古代の鑄銭司がおかれた。その由来を考えると、この地域における基層文化として製銅、製鉄の存在が浮かび上がってくる。本稿ではその基層文化を、下関市有富に残る「はんどう山のフォークロア」を銅滓の残るカンガ谷と結びつけて解釈し、さらに周辺地域の鋳山へと視野を広げていった。

この地域において(そして日本全体においても)最も古い製鉄の遺物は豊浦郡豊浦町の山の神遺跡出土の鑄鉄製鋤先(鋤の刃先)であり、紀元前2世紀のものとする。素材は中国江南の産出というから、倭的世界の遺物といえるだろう。

またその一方で、北部九州から本州西端地域における製鉄民の足跡として注目されるのは『記』『紀』における筒之男三神の伝承である。綿津見

神すなわち筒之男命⁽²⁸⁾は伊邪那伎命が「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」——山田宗睦氏によるとこの小門は福岡市西区小戸に比定される——で禊ぎ祓ひをしたときに現われる。綿津見神は安曇連等の祖神とあるから、筒之男命もこの阿曇氏の奉斎していた神とみることができる。阿曇氏の本拠地は後漢の光武帝が奴国に与えた金印の発見された志賀島の志賀ノ海神社周辺であり、また筒之男を祭る住吉神社の発祥の地である博多の筑前一の宮・住吉神社は小門の阿波岐原の東方に位置している。つまり阿曇氏は博多湾一帯を拠点にして活動していたということになるだろう。そしてこの筑前一の宮と、長門一の宮の下関市住吉、それに摂津住吉を結ぶ線が阿曇氏の移動経路、さらにいえば阿曇氏を先導者とした応神一族の移動経路と考えてよいだろう。

阿曇氏は倭的世界の海人であるとともに、「金」を名にもつ「宇津志日かなさくののみこと金折命」の子孫とされることから、製鉄民とみることができる。実際、下関市の住吉神社を含む一帯は古代における「額田部ぬかたべ」に比定されるが、「額」とは砂鉄の意味にほかならない。そしてこの神社の北方には砂子多川という砂鉄ないし砂金の採取地をうかがわせる川もある。また摂津住吉の太鼓橋の池畔からは豊富な砂鉄が出てきたともいわれる⁽²⁹⁾。このようなことからわかるように、阿曇氏は鉱物採集を業とする海洋系民族なのであった。

さて、その阿曇氏を従えた応神であるが、それは秦一族の大王であり、新羅あるいは加羅諸国より北部九州に渡来した強大な鉄王であった。彼らはこの地に秦王国を築き、のちに畿内へと移動する。「応神の東遷」はやはり「神武の東遷」と重ね合わされるべきことのように思われる。そしてこの応神の系譜は「応神5世」とされる継体（越前国を本拠とする北陸王朝）の出現とともに、息長一族の銅、鉄支配へとつづいていくのである。「フク」にかかわる地名の分布は息長支配の拡大を意味するものといえるだろう。

このように北部九州および本州西端地域における古代の製銅、製鉄の主

体は重層的なものである。ここに、中国江南系の渡来製鉄民族と朝鮮半島系の渡来製鉄民族との融合という「日本民族の重層性」の本質的部分をみてとることができるだろう。

〈注〉

(1) 小山修三『縄文時代』中公新書, 1984年。同書は各時代の遺跡数と一遺跡あたりの人口数の推計をもとに日本列島における人口総数を割り出しているが、縄文時代から弥生・土師時代の地域別人口を次のように捉えている(同書, 31頁)。

〔縄文時代の人口と人口密度〕

	早期	前期	中期	後期	晩期	弥生	土師
東北	2000 (0.03)	19200 (0.29)	46700 (0.70)	43800 (0.65)	39500 (0.59)	33400 (0.50)	288600 (4.31)
関東	9700 (0.30)	42800 (1.34)	95400 (2.98)	51600 (1.61)	7700 (0.24)	99000 (3.09)	943300 (24.48)
北陸	400 (0.02)	4200 (0.17)	24600 (0.98)	15700 (0.63)	5100 (0.20)	20700 (0.83)	491800 (19.67)
中部	3000 (0.10)	25300 (0.84)	71900 (2.40)	22000 (0.73)	6000 (0.20)	84200 (2.81)	289700 (9.66)
東海	2200 (0.16)	5000 (0.36)	13200 (0.94)	7600 (0.54)	6600 (0.47)	55300 (3.95)	298700 (21.34)
近畿	300 (0.01)	1700 (0.05)	2800 (0.09)	4400 (0.14)	2100 (0.07)	108300 (3.38)	1217300 (38.04)
中国	400 (0.01)	1300 (0.04)	1200 (0.04)	2400 (0.07)	2000 (0.06)	58800 (1.84)	839400 (26.23)
四国	200 (0.01)	400 (0.02)	200 (0.01)	2700 (0.14)	500 (0.03)	30100 (1.58)	320600 (16.87)
九州	1900 (0.05)	5600 (0.13)	5300 (0.13)	10100 (0.24)	6300 (0.15)	105100 (2.50)	710400 (16.91)
全国	20100 (0.07)	105500 (0.36)	261300 (0.89)	160300 (0.55)	75800 (0.26)	594900 (2.02)	5399800 (18.37)

注 () 内は1平方キロあたりの人口密度

- (2) この伝説は、下関市立図書館編『下関の伝説』（改訂版）、1982年、140-142頁、伊原晃融・内田貞紀『まんが ふるさと昔話（下関編）』クオリティ出版、1989年、107-122頁、大西正一『私本 川中物語』〈上〉、1991年、130-132頁、に採録されている。
- (3) 徳見光三『川中風土記』長門地方史料研究所、1970年、24-25頁。
- (4) 小林茂・中原雅夫『わが町の歴史 下関』文一総合出版、1983年、40-41頁。傍点は引用者による。
- (5) 大西正一『私本 川中物語』〈上〉、128-129頁。
- (6) 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書』（採鉱・冶金）、1982年、13頁。
- (7) 野村武史編『ふるさと本 下関北浦談義』1989年、111頁。
- (8) この点について、三坂圭治『山口県の歴史』山川出版、1971年、50頁、では「鑄銭司は、……長門国では国衙に付設され、その開設は和銅年間（710年前後）と考えられる」としている。
- (9) 以下の記述は、山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書』（採鉱・冶金）、谷川健一『青銅の神の足跡』集英社文庫、1989年（原著1979年刊）、平凡社版『山口県の地名』1980年、などの文献による。
- (10) 平野邦雄「秦氏の研究」（2）、『史学雑誌』70巻4号、1961年、72-73頁。
- (11) 吉野裕訳『風土記』東洋文庫、1969年、343頁。
- (12) 佐藤任『空海と錬金術』東京書籍、1991年、310頁。
- (13) 富来隆『卑弥呼』学生社、1970年、114頁以下。
- (14) 鈴木武樹『地名の起源』PHP文庫、1975年=92年、140-141頁。
- (15) 谷川健一『青銅の神の足跡』390頁。
- (16) 谷川健一『青銅の神の足跡』390頁-391頁。
- (17) 大久保秋夫「式内神社古宮八幡宮主神豊比咩考」、『かわら』20号、1983年、68頁。
- (18) 金達寿『日本の中の朝鮮文化』10、講談社、1988年、175頁。
- (19) 天本孝志『九州の山と伝説』葦書房、1983年、73頁。
- (20) 吉野裕訳『風土記』233頁。
- (21) 吉野裕訳『風土記』241頁。
- (22) 吉野裕『風土記世界と鉄王神話』三一書房、1972年。
- (23) 村上友一「採銅所地名の聞き書き帳」（3）、『かわら』23号、1985年、56頁。
- (24) 村上友一「採銅所地名の聞き書き帳」（4）、『かわら』24号、1985年、30頁。
- (25) 福岡県高等学校歴史研究会『新版 福岡県の歴史散歩』山川出版、1989年、

236-237頁。

- (26) 中野幡能『八幡信仰』塙新書, 1985年, 30-31頁。
(27) 中野幡能『八幡信仰』94頁。
(28) 本稿では綿津見神と筒之男命との異同について、「神」の名称は宗教的意義において用いられ、「命」の名称は人格的意義において用いられている、という倉野憲司氏の説に依拠して考えたい。
(29) 小田治『海人族と鉾物』新人物往来社, 1992年, 15頁。

〈参考文献〉

- 藤井一二, 1992, 『和銅開珎』中公新書。
葉賀七三男, 1983, 「古代長門の銅生産について」, 『山口県地方史研究』50号。
平野邦雄, 1960-61, 「秦氏の研究」(1)(2), 『史学雑誌』70巻3, 4号。
池田善文, 1982, 「古代長門国採銅所の予察」『山口県地方史研究』48号。
香春町郷土史会, 1983-87, 『かわら』20-27号。
金達寿, 1988, 『日本の中の朝鮮文化』10, 講談社。
清輔道生, 1991, 「八幡神教と良弁」, 『東アジアの古代文化』68号。
三坂圭治, 1971, 『山口県の歴史』山川出版。
中野幡能, 1985, 『八幡信仰』塙新書。
小田治, 1992, 『海人族と鉾物』新人物往来社。
佐藤任, 1991, 『空海と錬金術』東京書籍。
柴田弘武, 1992, 『風と火の古代史』彩流社。
谷川健一, 1979=89, 『青銅の神の足跡』集英社文庫。
塚口義信, 1980, 『神功皇后伝説の研究』創元社。
八木充, 1992, 「銅と鑄銭司」, 稲田孝司・八木充編『新版 古代の日本』4, 角川書店, 所収。
山口県教育委員会, 1982, 『生産遺跡分布調査報告書』(採鉾・冶金)。
山口市教育委員会, 1978, 『周防鑄銭司跡』。